

《今現在を悩める人の必読書》

『生きがいの創造』 飯田史彦 著



一般教科 梅野善雄

「生きる」ことの意味について考えるとき、この本は場合によっては画期的な精神的変化を読み手にもたらすかもしれない。

著者は、福島大学経済学部で「企業における生きがい論」を研究している中堅の大学教官である。経営学の学術専門誌に研究論文として発表した「生きがいの夜明け、一生まれ変わりに関する科学的研究の発展が人生観に与える影響について」がもとになっており、それをさらに専門家以外にも読みやすいように書き下したものである。

この本は、「生まれ変わり」（いわゆる、輪廻転生）に関して書かれている。「人は死んでも生まれ変わる」ことが最近10～20年の間に科学的事実として医学関係の研究者の間で急速に認められつつある、と著者は言う。どのような科学的事実があるかを示すために、外国の研究者（大学教授、医学博士など）のいろいろな研究結果が紹介される。そこでは、数千例にも及ぶ臨死体験や退行催眠の結果が科学的立場から厳密に分析される。退行催眠は既知の心理療法であり、熟練した精神科医によりかけられた催眠状態で過去に遡ると、被験者が生まれる以前の生にまで遡ることができるという。たとえば、退行催眠で過去に遡ると紀元前のバイキングとして生きたという人がいて、催眠状態のまま当時の海賊しか使わない言葉（古代語の研究者の助力でそれが判明）を交えて話し始めたということなどが紹介される。

これらの研究の多くはキリスト教文化圏におけるものであり、研究者も被験者も「生まれ変わり」ということなど考えたこともない人達であることには注意する必要がある。仏教的には古くから言われてきたことではあるが、そのことが宗教的な文献ではなく全て最近の学術研究から得られたものであり、結果として同じ結論が得られたことが何度も強調される。特に、著者自身に宗教色は全くないことが再三にわたり強調されている。

このような内容を国内の研究論文誌に投稿し、しかも受理されたこと自体が驚きである。著者自身も相当の覚悟の上での投稿であったと吐露している。しかし、原著「生きがいの夜明け」の反響はさまざま、発表以来、資料を求めるファックスが連日（多いときには一日に500通近くも）大学に寄せられ、最終的には7,000部の別刷り送付依頼があったという。

「生まれ変わり」に関する本であるということだけで拒絶反応を示す人もいるかもしれない。この方面の世界的な研究者も、それに反駁しようとして調査し、結局は認めざるを得なくなったという方が多いようである。著者は言う。「このことを信じるか信じないかは自由である」と。「信じない」場

合には、その人のそれまでの生き方には何の影響も与えない。しかし、「そのようなことがあるかもしれない」と思えた場合、以後のその人の生き方に与える影響には絶大なものがあると著者は言う。実際、「人生はこの世限りであり、死後の人生はない」という場合と、「死後も生まれ変わって次の人生がある。どのような人生に生まれ変わるかは、今の生き方にかかっている」という場合とでは、今現世における生き方は根本から異なったものとならざるをえないであろう。

特に、この「生まれ変わり」の研究から明らかになったこととして、この世のいろいろな困難はすべて魂の修行のために自らが計画したものであり、その困難をいかにして克服するかを課題として生まれ変わっているのであるという。その意味では、現世の困難から安易に逃げる道を選ぶことは、自らが自分に課した修行を大なしにする行為ということにもなる。

この本の続編として、「生きがいのマネジメント」「生きがいの本質」が刊行されている。最近、同じ著者の編集による訳書「生きがいのメッセージ」も出版された。また、原著である「生きがいの夜明け」は、インターネットでも読むことができる。

(<http://www.netizen.or.jp/~sam/realaim/Lifeindex.html>)

いずれ、今現在を悩みながら生きている者にとって、一度は目を通しておいて損はない本ではないかと思われる。

